う云ふ天性を持つてゐる兎が、たとへ空鑵を叩き、蕃聲を張り上げる勢子に追はれたからと云つて、おいそれと遮蔽物のない場所へ出て來るものではないが、出て來なければ獵にならないから、否でも應でも出て來るやうに追ひ出すことを工夫する。玆において勢子と兎の間に虚々實々の攻守が展開することになる。

何故に兎は林の中から綺麗に開けた原野や川原に飛び出さうとしないのであらうか。それは言ふ迄もなく鷹類の襲擊が恐ろしいのである。兎に取つて鷹類は實に種族の敵なので、これの害を避けることで彼女等は常に戰々兢々としてゐる。兎達こそほんとうの被壓迫民族と云へる。

追ひ詰められた兎のとる態度

出れば食はれると云ふ恐怖觀念を持つてゐる兎は、勢子の聲の强弱遠近の度を測り、叢林中を安全な地帶へ安全な地帶へと向つて逃避するが、萬事窮したと知つてとる兎の態度に二樣ある。一つは身を躍らせて、鷹匠の待つ危險地へ飛び出し、一氣にそこを突つ切つて再び安全地帶に跳び込まんとするもの。但しこの時は危險地帶の最も幅の狹い所を選ぶ。もう一つの方

は出ることの危險を十分に知つた兎で、かう云ふのになると逆戻りして、勢子と勢子の間を突つ切つて逆行するもの。これは最も賢明な兎のみに許された最も賢明な手段であると云ふのは、勢子は空鑵と蕃聲による騷擾の音源であるだけで、何等捕獲の元兇ではないのであるから……。

樹梢は身を護る唯一の防砦

遁避する兎にとつては一木一草が悉く防砦であるから、危險地帶へ跳び出した兎もこれに據つて逸早く安全地帶へ遁入しようとする。然し不運な兎にして間髪を入れない鷹の襲擊にあへば、そして若しその兎が巨大であるなれば、食ひ入るやうな鷹の握力に悶えながらも、强引にこれを引きずつて、近くにある樹の根元に到りこれに身體をすりつけるやうにして鷹の握力を振り放たんとする。これは鷹にとつても甚だ苦手と見え、まんまと摑へた獲物を無念にも取り逃がして了ふ場合もある。

鷹にとつてもつと苦手なのは、積み重なつた枯枝の下へ潜り込まれることで、この手を食ふと大抵な場合摑んだ兎を放さざるを得ない。かう云ふ時には、鷹の爪には必ずゴソツと抜けた

兎の毛だけが殘つてゐるものだ。最もかう云ふ強引な手を打つ兎は、體も大きく、力も強いものに限り、小兎などに至つては、グツと摑まれゝばキユーツと非鳴を上げ、その場に抑へ込まれて了ふのを例とする。

何れにしろ遮蔽物のない所へ出れば、鷹の御難のつき纏ふことは知り過ぎる位知つてゐる。さればこそ、却々林の中から原野へ跳び出さうとはしない。

兎の視力も馬鹿にならない

兎の視力が聽覺と同じやうに鋭いと云ふことは、ガンガラ兎獵の項でも述べたが、そのことは鷹による兎狩の場合でも確認出來る。前にも云ふやうに勢子に追ひ立てられた兎は多くの場合、鷹匠の線へ向つて直進するが、鷹匠の背後には獵の執行官とか或は、案内人とか或は參觀者が控へてゐる、勢子の聲が近づき、兎が接近してくると、鷹が第一番にこれを認めてかゝらんと盛に鷹匠の拳から乘り出す。かう云ふ時に參觀者の一人でもが樣子はいかにと身を搖り動かさうものなら、兎は早くもその場の氣配を見て取つて、文字通り脫兎の勢で横にすつ飛んで了ふ。この位のことでと思ふ程の身動きをも決して見逃さない兎の視力は馬鹿に出來ない。折

角鷹匠の間近まで突進して來た兎が、かうした參觀者の不用意な行動で、あはやと思ふ間に外れて了ふことは、實際に捕獲される兎の何層倍にあたるか知れない。これは一つに兎の持つ鋭い視力によると見る外はない。

鷹の視力は千里眼

故寺田寅彦博士は、トンビが天空を飛翔しながら食糧を搜すのは、鼠や蛙の腐肉の香が上昇氣流に乘つて舞ひ上るのを嗅ぐことによつて知るのだ、と云ふやうなことを云つてをられた。大變面白い奇拔な說と思つてゐる。それでは同じ肉食禽である蒼鷹や熊鷹、隼などゝ云つた鳥達は何を目あてに獲物を探すのであらうか。その好物である鴨だとか、雉だとか、兎だとかさう云ふものゝ發散する特別な香でも嗅ぐことによつて、獲物の存在を知るのであらうか。私は未だ曾つて、それを實證づける何等の機會にも遭遇しないから、はつきりしたことは云へないが、どうも鷲や鷹類に限り、嗅覺說を肯定することは不穩當ではなからうかと思ふ。それでは何によるのであらうか。私は專ら視覺によるものと確信してゐる。その一番いゝ例は鷂の鷹狩によつて見ても知られる。鷂も鷹を恐れる點においては雉や兎に劣らない。然し鷂は鷹類の最

も苦手な水濕の地に生活してゐるだけに、水上においては割合に大膽に姿を現はしてゐる。これはさアと云へば直ちに水中に突入することが出來ると云ふ自信ある條件を持つてゐるためであるが、稻の中や叢の中では危機一髪と云ふ際に潜るべき十分の水がない。かう云ふ環境にあつては、中々この草中から出て人の眼や鷹の眼につくやうなことはしないから、その生活環境圍を歩いてゐた位では、どこに鷸がゐることやら、とても見當のつくものではない。ところが、かう云ふ所でも鷹を据ゑて歩いて見ると直ちに、鷸がどこにゐるかゞ判る。何故に判るかと云へば、拳の上の鷹がその存在をちやんと發見して、盛にかゝりたがる。試みに、その鷹の狙つてゐる方角を凝視しても人間の視力では、到底そこに鷸の姿を認めることは出來ないでただそこには青々と成育してゐる稻を見るとか、葦を見るに止まる。どうみたところでその中に鷸が潜んでゐるなどゝは思へない。しかしながら拳の鷹を放してやれば狙は違はず、發止とばかりに飛んで行つて見事に抑へつけて了ふものだ。一日鷹狩に歩けばこんな例には三度や四度は必らず遭遇する。同じ角度から同じものを見ながら人間の眼力をもつてしては到底發見し得ない鷸を、ちやんと見屆ける鷹の視力は不思議と云へば眞に不思議である。人はこれを勘と云ふかも知れない。若しそれであるとすれば、同等の距離内にある繁茂する葦野の中の鷸にも感

應すべきであるが、これには全く無關心である。玆において鷹の透視にも限度のあることが判る。その限度は、稻ならば一尺五、六寸位に伸びた所、雜草なら一尺位と云ふところであらう。これを越えたところではいかな鷹の視力も要をなさない。これをもつて見ても、叢中の鷸を發見する力は勘ではない。尤も勘と云ふやうな不安定なものに依存してをつたら、鷹の腹の塞がつてゐることは少からう。これを要するに鷹が獲物を搜す最大な武器は、もつて生れた鋭い視力によるものと見るべきである。それは兎狩によつても證明される。鷹匠の拳の上に据ゑられてゐる鷹は、鷹匠がまだ發見し得ない兎が、藪の中を走つてくるのを逸早く發見してかゝる氣配を示すものだ。

隼を捕る獵では、置繩をつけた小鴨を投げ上げては飛ばす。降りればまた引き寄せては投げ上げる。かう云ふことを續けてゐると、千米よりもつと離れた海岸の松の木で、一夜の夢を結んだ隼は、逸早くこれを發見してさらひに出てくる。これなどは近い方であつて、遠いものになると、烱眼な獵師の眼でも發見することの出來ない天空を渡つて來る隼さへも、この小鴨の不自然な飛翔を認めて、矢のやうに飛來する。かう云ふ事實は抑々何を語るものであらうか。これをしも臭覺說と見なければならないであらうか。

鳶も鷲や鷹と同じ鷲鷹類の鳥である。このうち鳶だけが、上昇氣流に乘つて上昇する鼠や蛙の臭腐によつて、その食糧を發見すると云ふ說は、說としては大變面白いが、實際問題としては果してどうであらうか。私は視力說をとりたい。

昭和十七年四月十五日 印刷
昭和十七年四月二十日 發行

鳥獸の習性

（定價金參圓）

著者 堀内讃位
東京市小石川區大塚坂下町一〇二
發行者 森谷均
東京市小石川區指ヶ谷町一四六
印刷者 大森印刷所 大森清一
配給元 日本出版配給株式會社
東京市小石川區大塚坂下町一〇二
發行所 昭森社
電話神田(25)五〇三六番
振替東京 四六九六番
會員番號一一二二七番

製陶餘錄	吉憲	二・八〇	一四
陶器集第二集	吉憲	各一〇・〇〇	五七
笑亭綺譚	三郎	CB二二・八〇	〇〇
圖鑑・近江の林泉	溪楚	四〇・〇〇	三〇
竹	雄叔内	二・五〇	一四
竹	雄叔内	二・八〇	二三〇
サロメ（ビアズリ挿畫入）本	介之耿	七〇・〇〇	一四
竹	雄叔内	二・八〇	二三〇
竹	雄叔内	二・五〇	一四
圖	郎楚	四〇・〇〇	三〇
式	郎隆	CB二二・八〇	〇〇
富	吉憲	各一〇・〇〇	五七
本	吉憲	二・八〇	一四

東京麻布区霞町　振替口座　東京六九六四番　社　森　昭　東京市小石川区大塚坂下町

942
8

終